

家老屋敷で食べられていたもの

— 当館の出土遺物より —

松江歴史館が所在する松江城の東隣は、堀尾期以降重臣たちの屋敷地でした。

元文～延享年間（1736～1748）の松江城下絵図を見ると、松江歴史館の敷地内の北側は乙部家^{おとべ}、南側は朝日家^{あさひ}という松平期に家老をつとめたことのある重臣の屋敷地となっています。

松江歴史館建設に伴う発掘調査によって、南側の屋敷地の17世紀中頃～18世紀代の遺構面から検出した当時の“ゴミ穴”からは、貝殻や魚骨など大量の動物の残骸が出土しました。これにより、当時の家老屋敷地における食事などの動物資源利用の一端を垣間見ることができます。



サルボウガイ（殻）

出土地点：南屋敷第2遺構面SK13

松江歴史館敷地内から出土した動物遺存体では貝類が最も多く（670点）、サルボウガイが最も多い（140点、最小個体数74点）。中海に多く生息し獲られたサルボウガイは、現在も「赤貝」と呼び、食べる習慣がある。米子城跡にある久米第一遺跡^{あかがい}でも主体を占めており、江戸時代においても山陰地域で多く利用された食材であったとみられる。



ヤマトシジミ（殻）

出土地点：南屋敷第2遺構面SK13

松江歴史館敷地内出土の貝類のうち、サルボウガイに次ぐ個体数が確認されている。宍道湖に隣接する松江城下町は河口の汽水域の砂底に生息するヤマトシジミが当時も入手しやすい環境にあり、食材として数多く利用されたことが読み取れる。



ハマグリ（殻）

出土地点：南屋敷第2遺構面SK13

松江歴史館敷地内から出土した貝類では、サルボウガイ、ヤマトシジミに次ぐ個体数（64点）を採集している。広島城跡や松山城跡でも主要な出土貝類で、江戸時代も各地で利用された食材であったとみられる。

※南側の屋敷地の遺構面の時期

第3-1遺構面：17世紀中頃～18世紀前半

第2遺構面：18世紀前半～後半



サザエ（殻体、殻軸、蓋） 出土地点：南屋敷第2遺構面SK13

松江歴史館敷地内から、殻軸、蓋、殻体破片合わせて89点が出土し、殻体にはすべて棘を有する。サザエも江戸時代の遺跡で多く出土する貝類のひとつで、米子城跡所在の久米第一遺跡などでも出土している。



クロアワビ（殻） 出土地点：南屋敷第2遺構面SK13

アワビ類は松江歴史館の敷地内から62点確認されている。江戸時代の遺跡からの出土例が多い貝類のひとつである。



木簡「あわひ廿」 出土地点：南屋敷第3-1遺構面SK52

上方部は丸く加工され、紐をつけるための袢（えぐ）が入る荷札木簡である。墨書は「あわひ 廿」と読める。アワビが南側の屋敷地に運び込まれたようである。



ニホンジカ（大腿骨） 出土地点：南屋敷第3-1遺構面SK43

松江歴史館敷地内出土の動物遺存体のうち、貝類の次に多いのが魚類（78点）で、鳥類（27点）、哺乳類（15点）とつづく。哺乳類で最も多いのがニホンジカである（8点）。この大腿骨は、ほぼ完存状態で出土している。



スッポン（頭蓋骨、背甲板）

出土地点：（頭蓋骨）南屋敷第2遺構面SK09

（背甲板）南屋敷第3遺構面覆土

松江歴史館敷地内から出土した爬虫類は、スッポンの頭蓋骨と背甲板の2点のみである。頭蓋骨は確実に20cmを超える大型の個体のものとみられる。